

＜シンポジウム 21＞神経内科の教育プログラムはいかにあるべきか

ねらい

座長 帝京大学医学部附属病院神経内科 清水 輝夫
東海大学医学部内科学系神経内科 吉井 文均

(臨床神経 2010;50:1033)

高齢化社会を迎えて、神経内科医の役割は今後益々大きくなることが予想される。神経内科医の育成は神経学会としても大きな課題であり、それを旨とする医師を効率的に教育するためには、それなりの工夫が必要である。昨今の医学教育の現場では、卒前教育におけるモデルコア・カリキュラムの導入、CBT・OSCEの実施、クラークシップ型臨床実習の推進、卒後教育では新臨床研修医制度の発足などがおこなわれてきた。しかし、教育は流動的なものであって、その時代のニーズに応じた人材を育成するためには、常に効果的な教育方法を工夫し、学習に対する動機付けや集中力を高める方策を考え、適切にPCやiPod、インターネットなどの最新テクノロジーを利用し、しかも教育を受ける現代の若者の気質も十分理解した上で教育のプログラムを組み立てることが必要である。

本シンポジウムでは、その視点に立って、学習者に神経内科に興味を持たせるにはどうしたらよいか、神経内科疾患を効率的に教育するためにはどのような手段が有効か、ICTなどの科学技術を取り入れた教材開発をどのようにおこなうべきか、基礎医学との統合カリキュラムでリサーチ・マインドをいかに培うのか、そして将来における神経内科医の役割を踏まえた教育指導のポイントは何かなどをテーマとして、医学生、初期研修医、専門医を目指す医師の立場に立って、これらの問題を参加者と一緒に考え、討議してみたい。さらに、各施設における教育レベルを一層高めるためにも、海外でもおこなわれているように、教育資産の共有化の一環として、学会主導によるその中央管理化などの新しい教育体制の確立に向けての提言もできればと考えている。